

赤いえり巻き

小川未明

青空文庫

お花が、東京へ奉公にくるときに、姉さんはなにを妹に買つてやろうかと考えました。二人は遠く離れてしまわなければなりません。お花は、まだ見ないにぎやかな、美しいものや、楽しいことのたくさんある都へゆくことは、なんとなくうれしかったけれど、子供の時分から、親しんだ、林や、野や、自分の村に別れることが悲しかったのです。姉は、かつて、自分も一度、都へいつてみたいと心にあこがれたことがありました。しかし、ついに出る機会がなくて過ぎてしまいました。そして、もう奉公に出るには、あまり年をとってしまったので、自分は、村に残つて圃に出て、くわをとつて働くことにいたしました。

「なにを妹に、買つてやつたらいいだろう。」

姉は、ひとりで働きながら思つたのです。

たとえば、妹は、華やかな都へゆくのにしろ、家を離れるということとは、姉にはさびしいことでした。そして知らぬところへいつて、遠くみんなから別れて、一人で生活するということとは、どんなにか、心細いことであらうと思われると、妹がかわいそうになりました。

「せめて、いつまでも妹の身につくものを買ってやりたい。」と、姉は思いました。

このとき、そばの林の枝にとまって、赤いすかが鳴いていました。もう、秋もふけていました。林をおとずれる風は荒く、空の雲ゆきは早かった。そして、ところどころに、青ガラスのような冴えた色が見えたのです。

姉は、この秋から、冬にかけてくる小鳥をめぐらしそうに見ているうちに、ふと、心に浮かんだのは、この赤い鳥の毛のような、真っ赤な色のえり巻きを妹に買ってやろうということでした。東京は、雪は、あまりないが、冬は風が寒いと聞いている。外へ用事に出かけるのにも、えり巻きがなくてはならないだろう。赤いえり巻きを買ってやったら、妹も、さぞ喜ぶにちがいないと考えました。

姉は、町へ出ました。そして、洋品店で、赤いえり巻きを買って家に帰り、それを妹に与えたのであります。

「まあ、きれいなえり巻きだこと。」と行って、妹は目をみはりました。

「私は、考えたのだよ、東京のステーションに降りたとき、この真っ赤なえり巻きを置いていたら、迎えに出てくださる方に、おまえだということがわかるだろうと思つて……。それに、この赤い色は、悪い色でないと思つたのだから……。」と、姉はいいました。

お花が、上野駅へ着いたときに、彼女が心配したほどのこともなく、すぐに、出
 迎えにきていた奥さまや、坊ちゃんたちの目にとまったのです。そのはずで、赤い
 きが、たくさん汽車から降りた人たちの間でも、目立ったからでした。ちようど、朝
 日は、繁華な街の建物^{ひかり}のいただきを越して、プラットホームに流れていきましたが、そこ
 へ、日に焼けた赤い顔の少女^ひが、真っ赤なえり巻きをして歩いてきたので、赤い金
 魚^よか赤い着物をきたさるのよう^{あか}に、それが見えたのも不思議がありません。
 口の悪い、坊ちゃんたちは、お花に、金魚というあだ名をつけました。けれど、お花
 は、そんなことを気^きにかけるような性質^{せいしつ}でなく、いつも、田舎^{いなか}にいた時分^{じぶん}のよう^いに、い
 きいきしていました。そして、みんなから、かわいがられました。
 「お花、おまえは早のみこみで、こちらのいうことを、半分しか聞かないから、そんな
 まちがいをするのだよ。」と、奥さまからいわれることもありました。
 ほんとうに、彼女は、そそっかしやで、よく、茶わんを壊したり、たなからものを落
 としたりしました。

「また、お花が、なにか落とした。」とって、しまいには、小言をいうよりか、みんな

は、それが愛嬌あいきょうになつて、おかしがつて笑つたのです。

それほど、彼女かのじよは、罪つみのない少女しょうじよでした。

「お花はなは、東京とうきょうがいいか、それとも田舎いなかがいいかい。」と、家のものうちが、聞ききました。
彼女かのじよは、すぐに返事へんじをせずに、笑わらつていましたが、二つの黒い目くろめをかがやかしながら、

「おら、田舎いなかがいい。」と答こたえました。

「どうして？」と、家の人うちひとたちは、いいましたが、こう聞ききくまでもなく、華やかな自然しぜんが目の前めまえに開ひらけて、鳥とりのように自由じゆうに駆けまわつたであろう彼女かのじよの姿すがたを想像そうぞうすると、なんとなく彼女かのじよが不憫ふびんに感かんぜられたのであります。

ほんとうに、東京とうきょうの冬ふゆは、雪ゆきこそ降ふらないが寒さむかった。彼女かのじよは、使つかいに出でるのに、姉ねえさんが、こちらへくる時分じぶんに買かつてくれた、赤あかいえり巻まきを忘れわすれずにしていききました。

それには、なつかしい姉あねのまごころがこもつていると思おもわれたから……。田舎いなかから、手紙てがみのくるたびに、彼女かのじよは、目めをうるませていました。

「お花はなは、あの赤あかいえり巻まきが、たいへんに氣きにいつているらしいんですよ。」

こう、奥おくさまは、主人しゅじんにいわれたこともありませす。

「あのえり巻まきをして、汽車きしゃから降おりたとき、真まつ赤かだったね。」と、子供こどもらは思おもい出し

て、お母さんにいいました。

「なに、もうすこしたつと、お花もすつかり東京っ子になってしまふから。」と、そのとき、お父さんはいわれました。

* * * * *

ある日、小さな子供をつれて外へ出たお花が、なかなか帰ってこないの、家じゅうが大騒ぎをしたことがあります。

「どこへいったのだろう。」

みんなは、お花をさがし歩きました。しかし、いつも近所にいるのが、その日にかぎって、どこへいったか、その影が見えませんでした。

「町の方へでもいったのかも知れない。小さなをつれて、けがでもさしたら困ってしまふが……。」

こう、家の人たちはいつて、心配しました。それから、町のにぎやかな通りの方へさがしにゆきました。すると人集まりのしている活動写真館の前に、真っ赤なえり巻きが、黒い人波にもまれながら、はつきりと見られたのです。

「あそこにいるのは、お花だろう……。」

はたして、彼女でありました。

家に帰ってから、この後、こんなことがあつてはならないと聞かされた後で、

「赤いえり巻きをしているから、わかっているから、わかっている。」といわれると、

「私、赤いえり巻きなんか、いやになつた。」と、お花はいいました。

「なぜ、きれいでいいじゃないか。それに、おまえの姉さんが、買つてくださったのだから……。」「と、家のものがいいますと、お花は、下を向いてだまつていました。

お花には、もうだいぶ、給金がたまつたころであります。このごろは、都会の娘の持ちそうなものがほしくなつたとみえて、白粉や、香油のびんなども、いつのまにか買ったものが、戸だなの中にかくしてありました。

ある、風の吹く日のこと、彼女は外から帰ると、ちがった水色の流りの長えり巻きをしていました。

「そんないいのを買ったのかい。赤いえり巻きはどうしたの?」と、奥さまは聞かれたのです。

彼女は、顔を赤くして、笑っていたが、

「汚したので、さおにかけておきましたら、とんびがさらっていつてしまいました。」と、

顔をあげて答えました。

「とんびが？ あの子の赤いえり巻きをさらっていったの？」と、奥さまは笑われました。

「はい、昨日のお昼ごろ、さらっていったんです。」

みんなは、顔を見合って笑いました。

「ほんとうかい？」

「うそだろう……。いやになったから、捨ててしまったのだろう……。」

「いいえ、ほんとうです。」と、お花は答えました。

田舎の姉が、しんせつに買ってくれたものを、たとえ捨てたにしろ、捨てたといわれ

なかつた。とんびは、よくものをさらってゆく。だから、とんびがさらっていったとい

たら、だれでもしかたがないと思つたからであります。

子供たちだけは、お花のいったことをほんとうだと信じました。そして、大人たちは、

お花はお花らしいうそをいうものだといつて、笑つたのであります。

* * * * *

ちやうど二年めの春であります。お花の姉が、病にかかかったので、お花は、田舎へ
帰ることになりました。もう、そのころは、彼女は、東京のほうで、田舎よりもよ

かつたので、帰るのをいやがりました。

「また都合がついて、出てこられるようになったらおいで。」と、家の人々は、お花の帰るのを惜しんだのでした。

彼女は、ふたたび田舎の人となつてしまった。その後、たよりがありません。東京の夏の空に赤い雲が、旗のようにただよつて見えると、

「お花のえり巻きのような雲だね。」と、坊ちゃんがたは、空を仰いでいました。

「ほんとうに、とんびがさらつていつて、捨てていったのかもしれないよ。」
赤いえり巻きのような雲は、高い煙突の上に、また光った塔の上に、風に吹かれて、ただよつていましたが、また、いつのまにか消えてしまいました。

こうして、今年の夏も、暮れてゆくのでした。そして、北の方の田舎には、もう秋がきたのです。木枯らしが、海の上を吹き、野を吹き、林を吹きました。その時分になると、真っ赤ないすかが、どこから飛んできて、木の枝にとまって鳴いたのです。

もし、これをお花が、圃に出て見たなら、かならず、自分のなくなつた赤いえり巻きを思い出し、東京の坊ちゃんたちのことを思い出したであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「童話研究」

1928（昭和3）年9月

※表題は底本では、「赤《あか》いえり巻《ま》き」となっています。

※初出時の表題は「赤い襟巻」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：きゆうり

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤いえり巻き

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>